

組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名： 嶋田 奈穂子	提出日：平成 23年 1月 24日
東南アジア研究所における職名： 特任研究員 *右記の該当する職位に○をつけて下さい。(講師・助教・助手・ポスドク・博士課程学生・修士課程学生・学部学生)	
派遣先の研究機関等(調査を実施した国名・機関名及びカウンターパート名)： 国名：ラオス人民民主共和国 機関名：ラオス国立大学 カウンターパート：Dr Phout Simmalavong, Dean, FSS *派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所に○をつけてください。(大学・研究機関・企業・その他)	
派遣期間：平成 22年 11月 1日 ~ 平成 23年 1月 21日 (派遣日数：82日)	
研究活動等の主な内容(該当する番号に○をつけてください。複数可) ①研究・実験 ②フィールドワーク ③セミナー ④インターンシップ ⑤サマースクール等の講習 ⑥学会出席 ⑦単位取得等 ⑧その他	
研究活動の主な領域(該当する番号に1つ○をつけて下さい。) ①人文学 ②社会科学 ③数物系科学 ④化学 ⑤工学 ⑥生物学 ⑦農学 ⑧医歯薬学 ⑨総合領域 ⑩複合新領域	
派遣の概要(500~700字程度) ラオスでの調査日程は、以下の通りである。 2010年11月1日 : 日本からラオス・ビエンチャンへ移動 2010年11月2日~11月7日 : ビエンチャン滞在。ラオス国立大学にて、調査の打ち合わせ 2010年11月8日~11月9日 : ビエンチャンからルアンナムター県へ移動 2010年11月10日~2011年1月16日 : ルアンナムター県ルアンナムター郡を中心に、調査 2011年1月17日~1月18日 : ルアンナムター県からビエンチャンへ移動 2011年1月19日 : 報告書の作成・ラオス国立大学へ報告 2011年1月20日~1月21日 : ラオスから日本へ移動・帰宅 調査には、ルアンナムター県農林局のKhuiさんがパートナーとして同行してくださり、主としてヒアリングの補助をしていただいた。また、11月11日~11月19日、1月3日~1月16日は、通訳として東南アジア研究所研究員の虫明悦生氏、12月18日以降は、聖泉大学教授の高谷好一先生が調査に同行して下さった。 この調査に対して、ラオス国立大学社会科学部、ルアンナムター県、ルアンナムター郡、ルアンナムター県農林局、ルアンナムター県文化局、ルアンナムター郡農林局に協力いただいた。 今回は、ルアンナムター郡78カ村のうち、62カ村を調査した。調査しなかった16カ村のうち、8カ村は山中に位置し、道の状態が悪かったために訪問することができなかった。残りの8カ村は、新たに都市計画された区画に位置する都市部の村である。同じ背景の村の調査を行ったところ、都市部の村には寺以外の精霊に関する場がないことがわかったため、調査対象からはずした。 各村での調査内容は、①村の基本情報、②精霊(Phi)にまつわる森林に関して…有無、立地、構造物等の有無、禁忌・祭礼、昔の状況に関してのヒアリング、③精霊林等の見学(可能な村でのみ)、地図作成、であった。	
事業に係る研究成果(500~700字程度) この調査は、ラオスの神聖空間(鎮守の森・精霊林など)を調査し、その形状や立地、地域との関わりを明らかにすることを目的としている。今回調査を行ったルアンナムター郡の62カ村では、およそ7割の村で、村の鎮守神(Phi Baan)がいるとされる森林、樹木、建物が確認された。また、これらの鎮守の森と対をなすように存在する墓の森については、およそ9割の村にあった。このような確率を述べることは、本来はあまり意味がないのだが、当初は想定していなかった高い割合であるため、あえて述べた。なぜならゴムの植林が進むルアンナムター郡では、鎮守の森などの神聖空間が残っているかどうかさえ、当初は定かではなかったからである。しかし、神聖空間の全体的な把握をするために十分な森が、今も村々に息づいていたことを知ったのは、大きな発見であった。そのうえ、ルアンナムター郡は居住する民族のバラエティも豊かであるため、神聖空間に関する民族ごとの差異や共通点も目の当たりにすることができた。 しかし、かつては戦争、最近では生業の変化や政策によって、村や人が移動するたびに神聖空間もその姿を変えているようである。この調査では、村によっては、戦前からの村の記憶のある60代半ば以上の方にもヒアリングすることができ、神聖空間の変遷を捉えることができた。 この調査は、今後、ラオスの神聖地とその他の地域、特に日本の神社との比較を行ううえでの基礎的な情報を得る、大変貴重な機会であった。	

